

# 江差線10駅 最後の夏

## ③ 吉堀



木古内駅から渡島鶴岡駅を経て山の麓に沿って走ると、黄色の駅舎がひとさわ目立つ吉堀駅が、田畑広がる農業地帯の一角に見えてきた。

無人の駅ホームにたまたむと、近くの牧場から牛の鳴き声が聞こえてきた。線路を挟んでホームの反対側に広がるのは青々とした田んぼ。突にのどかな雰囲気だ。

現在の吉堀駅舎は1986年、貨物列車の車庫車をもとに建てられた。1935年(昭和10年)12月10日に木古内—湯ノ岱間開通に伴い開業。貨車を改造した駅舎の設置に伴って前の駅舎は取り壊された。木古内駅から5・4km。

# 牧歌的な雰囲気漂う

改造して設置されたもの北斗市在住は「小、中、学に通うため、毎日吉堀駅だ。駅員のいない無人駅で、高校と列車で通学。一冬の早稲田にも民家が少ない。だが溝田の時は窓から乗り込んできた朝は真っ暗で道路も除雪が、かつては木道の駅舎が「んだものだ」と懐かしむ。線路はラッセ立ち、82年までは駅員2人、すっかり寂れた駅前だが、ルンで除雪も行き届いていて勤務していた。近くに福 駅前広場は大川地区の中心。家から駅まで線路の保線区があって、職員と だった。益壽も行われ住 家族も多く暮らし、駅前 で 民が幾重にも輪を作っ 商店が営業していた。

父親が旧国鉄職員で、自 大川町内会長を長く務め 近くの道道を車が走り抜け 身も吉堀駅のある大川地区 た農家の川瀬盛美さん(80) 時、列車の到着時を除 けで生まれ育った元JR北海 も江差線には思い出があ き、静かな時間が流れてい る。川瀬さんは旧制江差中



貨物列車の車庫車を改造した黄色の駅舎が目を引く吉堀駅